



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.162
2017.3.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

加曾利B式土器

— E.S. モースと坪井正五郎のはざまで —

鈴木 正博

● 第14回 ● クロス土器と標本の新たな役割

椎塚貝塚から大森貝塚へ接近するとき、モースが定量的選択した「十字架形」突起と「ソロバン玉形」深鉢は椎塚貝塚では殆ど見られず、両遺蹟間の類似を基盤とした比較形態学では定量的相異の標本認識こそが大森貝塚の顕著な特徴とすべき点から、この二者は「大森式」と呼ぶに相応しい。特に後者では椎塚貝塚の第17図が注目され、大森貝塚との類似が指摘されるが、椎塚貝塚では大森貝塚の標本をそのまま受け入れる如き共通化連繋現象は認められない。

そこで今日的には第17図の大森貝塚の形態と椎塚貝塚の装飾が一体となるクロス(混血)変容現象に対しクロス土器として注意を向け、そこにはクロス関係で受容しなければならない相互の緩衝的状況が発現し、「類似の形態連繋論」とは異なる構えが必要となる。即ち、近隣同士の定量的共通化連繋関係ではなく、遠隔縁辺による定性的クロス変容関係に注目する構えである。形態位相の相異は定量的にも定性的にも発現し合う状況が一般であり、例えば椎塚貝塚の定量的位相は前述した「高杯形」を一例とする。

では、クロス土器は注目を浴びる「ソロバン玉形」深鉢にだけ生起する現象であろうか。改めて「十字架形」突起についても見直すな

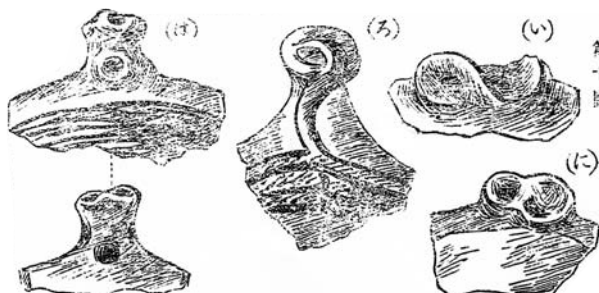
らば、第18図(は)が粗上に載るであろう。報文では第18図(ろ)と(は)の突起に拳を挙げる腕に似ることから共に「拳形」と命名するが、後年の坪井正五郎は「横壺芝形」の中で拳の側面形にのみ「拳形」と改名しており、師弟の関係にも拘わらず分類名に同名異義という今日の「草創期」同様厄介な齟齬が見られる。齟齬は学史的注意のみで措くとして、深鉢(は)の体部装飾には横帯区画内を平行な斜線で充填する『日本先史土器図譜』の加曾利B2式の作法が見られるものの、加曾利B2式に(は)のような突起を附することは殆どない。(は)の突起の形態はその基部の内外に施される顕著な押点文が第15図の「十字架形」突起と共通することから「大森式」の作法を受容しており、両者のクロス関係にある。

このようにモースが大森貝塚で定量的選択した「十字架形」突起と「ソロバン玉形」深鉢は、椎塚貝塚ではそのままの共通化製作は見られず、類似の形態を有しつつ異なる装飾が関与することになり、形態と装飾によるクロス関係が状況として導出される。

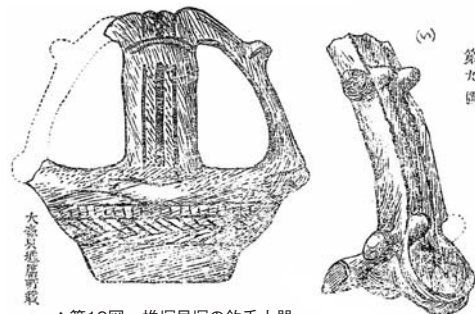
さて、椎塚貝塚が大森貝塚との比較を重視するのは何故であろうか、標本の意義も含めて確認する。同時期に進められていた土器片の精緻な分類と類例の検索を身上と

する坪井正五郎の西ヶ原貝塚における網羅的な個体別整理・報告を参考にしつつも、発掘成績の良い椎塚貝塚の全体的な傾向を観るためには、同様に標本の多い大森貝塚との構造的な形態位相比較が最も相応しいと判断されたのであろう。特に単なる比較に留まらない大森貝塚との比較形態学を実践する契機についても八木契(本連載「契」の誤記を訂正)三郎・下村三四吉は報文にて丁寧かつ詳細に記している。

第19図(い)は坪井正五郎の巡回で採集された資料である。やや異形で一部分であるため、その復元記載には考証が必要となる。そこで単なる類似の指摘ではなく、全体の構成のどの部分に相当する形態か、の復元検証に当たり、大森貝塚の釣手土器を参照標本とし、多少の違いはあるものの全体に類似を認め、「從テ(い)ハ、或土器上縁ノ四方ニ附セラレ中央ニテ相結合スベキ把手ノ一部ナルコトヲ知り得ベシ。上面ニ上下二個ヅツ相並ンテ存スル凸起ハ、中間ニ通スベキ紐ノ留メト思ハル、側面ノ凸起ハ装飾ノ為ナラン。」と結論する。これは即ち、断片を断片として記載するに留めず、あるべき全体への推定復元にまで標本活用の次元を高める新たな手続きと成果である。



▲第18図 椎塚貝塚の突起(一部)



▲第19図 椎塚貝塚の釣手土器

※巻頭連載は隔月です。次回は再び神村先生です。

目次

■加曾利B式土器 クロス土器と標本の新たな役割(第14回) 鈴木正博 …1
■考古学の履歴書 ことのはじまり(第7回) 間壁忠彦・間壁霞子 …2

■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト(第155回) 増山順一郎 …3
■考古学者の書棚「大工道具の日本史」 矢部 瞳 …4

考古学の履歴書

ことのはじまりー「..それでは 何だ」(第7回) 間壁 忠彦・間壁 霞子

3. 固まってしまった瓦経(2)

粘土塊となり固まってしまった安養寺瓦経塚の調査は、石田茂作奈良国立博物館長の指導で、発見から半年後の1958(昭和33)年12月に実施した。

粘土のように固まった瓦経は全く他に類例がなく、そのうえ、瓦経塚の所在地や瓦経そのものは古くから注目され研究もされてきたが、偶然の発見で瓦経が取り出され断片となるものが多く、瓦経が散逸したのもあり、それぞれの瓦経塚の資料が分散されて所蔵されるなど、瓦経の全容が明らかでないのが殆どで、瓦経塚での正確な埋納状況が判っている例は、それまで皆無だった。瓦経塚そのものの発掘調査も最初のことになる。粘土が固まった状態への対応がまず問題であった。

石田館長も、前例のない資料の調査方法には困惑され、地表に露出して板状に剥がれた小断片を焚火で焼くなどを試みても良い効果は期待できそうにもない。とりあえず、粘土の塊の範囲を確認するため、地表の土を取り除き、その広がりを知る作業に着手し、東西150cm、南北110cmの範囲であることが判った。上面は削平されて一部消失し、南と東に傾斜した地形のため一部が失われているが、ほぼ全体が残存した状況と思われた。

続いて、傾斜面になっていた南面と東面を掘り出し、上面を削り出すことで、土中に埋納した瓦経が粘土化して接着、粘土塊となっている状況が明らかとなる。瓦経の類が製作、乾燥され、焼成もされたが、焼きが甘かったため、全体が元の粘土に戻ったと推定できた。埋納状況の概要は現場で大略が判明した。

それは、粘土塊の広がり大きさの掘り方の中に、縦22cm、横20cm、厚さ2cmばかりの方形瓦経を、南北に写経面を向け、北から南へと立並べること七列、これを二段重ねし、下段の南辺に円板形の図像瓦、上段の南辺中程に宝塔形品、宝塔の東と南に塔婆形瓦経を配したものであった。

続いて、瓦経の類を一枚ごと剥離し、さらに錐書した写経の文字が泥土で埋まっているのを筆に水を付けて洗い出す仕事になるが、これには多くの時間を要す。現地で実施できそうもなく、室内で行うほかない。山中でのことであり、現今のような重機もない。粘土塊をそのまま切り出して運ぶには大きく重すぎる。やむなく三つに分割して運ぶことにし、切断には大きな木材用の鋸を用いた。そうした作業の過程で先に発見され重要文化財に指定されている瓦経の出土地点も、今回の埋納地点のすぐ北側だと確認出来た。

粘土塊を倉敷考古館へ運び一枚ずつに分離し写経の文字を読む仕事は、現地の作業が終った翌月の1959年1月から8月まで、私達両名がほぼ毎日あたるといふ長期のことになった。一枚ごとに剥がすとき断片に割れる。それを接着し、次に刻字面の文字を洗い出す。それも全部の文字が読み取れるのではなく、一部の字が判明するに過ぎない。そして読みとれた文字を経典に当てはめる作業が続く。これにもまた手数がかかる。一般の経塚のように法華経と心経程度の経であれば、普通に流布する経本に当てはめればよいのだが、法華経一部八巻、仁王経上下二巻、薬師経、不動経、金剛経、懺法(行法)、阿弥陀経、

寿命経、心経などと多数の経典が含まれていて、大部の大正新修大蔵経の経文と対比し、どの経のどの部分に当たるかを調べることになる。膨大な労力を要するものであった。加えて新修大蔵経には収録されておらず、日本大蔵経におさまる不動経のような経があったり、新修大蔵経にある二種の経典の中間形といえる懺法の復元まであって大変な仕事量となった。

現在では、「大正新修大蔵経データベース」があって、これを利用すれば大分省力出来るのであるが、半世紀以上も前の1959年ころにはデータベースの利用など思いもよらぬことであった。

こうして明らかになった七列・二段に配列されていた方形の瓦経は、判明した経典の復元枚数と次回に記す願文二枚(以上)を加えて318枚、実際に残存した数は文字が解読不能であった15枚をふくめ302枚であった。東南角で消失していたのは、16枚程度と推定でき、本来埋納されていた殆どの方形瓦経が残存していたといえる。

そうした方形瓦経は、それぞれの経で纏められ、経文の順序に従って埋納されているものと期待したが、経種別も経文の順序もなく雑然とおさめられていた。書写、乾燥、焼成、運搬、埋納などの手順の度に、丁度カードを繰るのと同じことが繰り返され、経種別・経文順に整理されることもなく納められていた。ただ、文字が逆転して納められた例は皆無で、経文の天地のみは意識していたのであろう。

方形瓦経のほか、中央上部におかれた土製宝塔は、形の一部が判り重文とっている宝塔と同形とみられた。下段南部に置かれた円板形品は片面に仏画を線刻したものが11枚確認された。従来の瓦経塚で線刻仏画が知られる例では、方形瓦経と同形の瓦が用いられ、円板形品は初出であった。配列の上段宝塔の付近にあった塔婆形の瓦経は、表・裏各三行の野線内に三千仏名経を書写、経文を復元的に当てはめると235枚となり、存在が確認できたのは30枚余にすぎず、配列の上段の更にも塔婆形瓦経を埋置したものが流失したのであろう。

こうした調査結果は『安養寺瓦経の研究』同刊行委員会(1963年)に発表した。

間壁忠彦 略歴

| | |
|------------|--|
| 1932年 | 岡山県児島郡甲浦村(現岡山市南区)郡に生まれる |
| 1951年 | 岡山県立操山高等学校卒業 |
| 1955年 | 岡山大学法文学部法学科卒業 |
| 1954~1973年 | (財)倉敷考古館学芸員 |
| 1973~2006年 | 同上館長 |
| 1968~1998年 | 広島大学、1968~1980岡山大学非常勤講師(博物館学)、他に熊本・九州・愛媛・鳥取・千葉大学へ博物館学非常勤講師出講 |
| 1982~2005年 | 就実女子大学非常勤講師(考古学)、ほかに島根大学へ考古学非常勤講師出講 |
| 2006~2015年 | (財)倉敷考古館学術顧問 |

間壁霞子 略歴

| | |
|------------|---|
| 1932年 | 岡山市門田屋敷(現岡山市中区)に生まれる |
| 1951年 | 岡山県立操山高等学校卒業 |
| 1955年 | 岡山大学法文学部史学科(日本史専攻)卒業 |
| 1955年 | 岡山大学法文学部副手(池田家文書整理) |
| 1956~2015年 | (財)倉敷考古館学芸員 |
| 1979~1986年 | 中国女子短期大学非常勤講師(歴史学) |
| 1985~2004年 | 神戸女子大学非常勤講師1年を経て助教授(1991年まで)教授(2004年まで)、以後同大学名誉教授 |
| 1995年 | 明治大学で論文博士(歴史学) |

隔月連載です。次回は岡田淳子先生です。

Jレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 155

下田城遺跡 ～静岡県下田市

増山 順一郎

下田城は、伊豆半島のほぼ先端部の静岡県下田市に所在する戦国大名北条氏の山城である。城は下田湾の南に張り出した通称鵜島(うじま)という小半島にあり、三方を海に囲まれた特徴的な立地となっている。

下田城の築城年代は定かでないが、戦国時代末期の天正年間、小田原を本拠地とした北条氏は、豊臣秀吉との対決に備え、下田の地を取り立て、豊臣方水軍の襲来に備えて城を整備した。城は、北条水軍の拠点となる港を防御するかたちで縄張したと考えられており、起伏に富んだ地形に延長700メートルに及ぶ堀や土塁、曲輪が設けられている。

天正15年(1587)、秀吉は四国に次いで九州を平定した。天下統一は目前となっており、もはや秀吉に従わない勢力は、北条氏や伊達氏などわずかとなっていた。秀吉は北条氏政・氏直父子に上洛を求めたが、北条氏は応じず、さらに沼田領を巡って紛争を起こしたため、ついに秀吉は小田原征伐を決意し、天正17年(1589)11月、北条氏に宣戦布告することとなった。

秀吉は東海道北上軍、北国軍、水軍を組織し、膨大な兵力をもって小田原攻めに乗り出した。天正18年2月末、清水港(静岡県静岡市)に集結した豊臣方水軍は、長宗我部元親や九鬼嘉隆、脇坂安治ら水軍の将が率いる総勢1万4千に及ぶ大軍であった。対する北条方は、以前から各城を整備拡張し、領国の防備を固めていたが、下田城を守備したのは、城将清水上野介康英以下、600名余の寡兵であったといい、本来配備されるはずだった北条水軍の姿も無く、兵力の差は歴然たるものだった。

下田城攻防戦の様子は詳らかでないが、同年3月下旬には、城は豊臣方に陸海の両面で包囲された。清水康英は圧倒的な敵兵力を眼前に籠城し、約50日の戦いを経て4月末には脇坂安治らの勧告を受け開城したとされる。この2ヶ月後には小田原本城も降伏し、ここに戦国大名北条氏は終焉を迎えることとなった。

廃城後の下田城は、江戸幕府の御林として管理され、維新後は宮内庁管理となった。そして、明治45年に下田町が払下げを受け、公園として整備され今日に至っている。

城址は、昭和48年に下田市史跡に指定され、現在でも空堀や土塁、曲輪などの遺構が良好に残っている。しかし、一方で観光公園として15万株ともいわれる紫陽花が植栽され、鑑賞用の遊歩道が遺構と交差しながら整備されており、史跡と観光名所という二つの顔を持っているのが現状である。

下田出身者でない自分が下田城を訪れたのは二十一年前の春だった。春風の中、尾根を蛇行しながら続く空堀を初めて目にした。後北条氏築城の特徴である畝堀が見え、深々と掘削された箇所もある。本曲輪までの斜面は急峻で、妨げる者がいない現在であってもよじ登るのは困難だ。大変な労力をもって普請されたであろう遺構を前に、400年の時を超え、領国を死守しようとする強い意志と、強力な豊臣水軍が迫りくる緊張感を肌で感じた。以降、文化財保護行政と観光推進の狭間で、何度も下田城を訪れ、休日には幼い娘を連れて散策したが、長い間発掘



▲下田城全景

調査する機会は得られなかった。

下田城は海に面していることから、台風襲来ともなれば強風で樹木が倒れ、斜面が崩落することもしばしばであった。そんな中、初めて行った発掘調査は、平成19年2月の園路の復旧工事に伴うものだった。遺構に与える影響を最小限とした工事であったため、調査範囲は限定的だったが、数カ所の柱穴状遺構と常滑や志戸呂などの遺物が出土した。

下田は冬場になると強い西風が吹く。調査地点は標高60メートル程度であったが、吹き上げる風は凄まじく、方眼紙を抱きかかえ、工事用ゴーグルを着けてかじかむ手に息を吹きかけながら実測したことを思い出す。調査地点からは下田の町並みが一望できた。天正18年、この城に籠った城将清水康英は、若き日より関東一円を転戦した猛将だった。彼は眼下に蠢く豊臣方の大軍勢を見て何を思っただろうか。圧倒的な兵力に対峙し、なお戦意を失わなかったろうか。それとも悲痛な覚悟か、人質として小田原に差し出した子のことを思ったかもしれない。600名の城兵は援將一党を除けば康英の庶流と同心、伊豆半島南部の者たちであった。彼らの命を預かる重責もあったろう。出土した小皿や壺片を取り上げた時、籠城した兵士たちの思いを考えずにはいられなかった。

籠城五十日の末、清水康英は降伏し、自らは近隣の河津林際寺に隠棲した。すでに老齢に達していた康英に最後まで付き添ったのは南伊豆の同心高橋丹波守だった。現在でも高橋家には康英の決別状が伝えられている。書状には、付添に感謝しながらも、敗將と同心がいつまでも一緒にいてはいけない。丹波が去ったとしても、自分(康英)を見捨てたことにはならないと丁寧に記され、末尾で丹波が防戦に奔走したことを賞している。

文化財として、その万全な保護保存は無論だが、下田城に籠って強大な豊臣水軍に挑んだのは、伊豆半島南部の武士たちであり、老將と同心の間に絆とも言うべき感情が交わされたことも併せ、地域の宝として大切にしていきたい。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは森原明廣さんです。

考古学者の書棚

「大工道具の日本史」

渡邊晶／吉川弘文館(2004)

矢部 瞳

今回「考古学者の書棚」に文章を書くという話をいただいてから、どの本にしようかと少々悩んだ。私自身木製品を扱う機会が多く、いつも手元に置いているこの一冊を選ぶことにした。

大学卒業後まもなく報告書整理作業で木製品にかかわることとなり、どうしたらよいか訳も分からないままに出会ったのがこの本である。

著者は建築技術史を研究され、出版時には竹中大工道具館で主席研究員をされていたかたである。この本はB6版200ページで、工具や建築についてコンパクトにまとめられており手に取りやすい。

本書は、機械による建築生産が中心の時代において「手道具による建築生産の歴史を記述し、その歴史の中から、私たちの未来を考えると、そのことにわずかでも寄与すること」を目的として書かれている。

構成は以下の通りである。

手道具の歴史と人類の未来—プロローグ
木の建築を作る技術と道具
大工道具の誕生 旧石器から縄文時代
鉄器の導入と大工道具の発展 弥生・古墳時代
渡来した新しい建築技術 古代・中世
大工たちの近世
多様化する大工道具と技術
大工道具の一万年—エピローグ

内容については、旧石器時代・縄文時代、弥生時代・古墳時代、古代・中世、近世、近・現代という時代ごとに、樹種などの建築用材、建築構法と部材接合法、工作技術、工人、道具編成という5つの項目について記述し、最後に斧・鋸・鑿・カンナの道具ごとの発達史をまとめるという流れになっている。

扱う資料は、文献資料、絵画資料、実物資料、建築部材(刃痕)を基本四資料としている。

今回、改めて読み返して印象に残った内容をいくつか書いてみたいと思う。

出土資料を基にした道具製作や、建築復元実験をとりあげた考察がいくつかある。その一つは富山県小矢部市桜町遺跡での実験である。石斧の製作、伐木、製材、建築部材の加工、大型高床建築の復元と、建築にかかわる一連の作業について実験が行われている。興味深かったのは建築部材加工の実験についてである。柱材に柄穴を穿つ際、小型の鑿では作業が進まなかった。そこで、石斧の直柄先端を切断して軸線方向に石器を装着した大型石鑿を作るという工夫を施して、やっと作業が進んだという。手を動かす仕事には工夫・改善がつきものである。木製品をモノとして扱ってしまうことが多いが、背後にある人の動きを考えなくては、と考えさせてくれる内容であった。

古代・中世の項目では、『万葉集』で詠まれた歌について考察が加えられている。7つの歌に「手斧」「新羅斧」「斧(音)」など斧が登場している。「手斧」は「薪刈り」が用途であることから、手斧と書いて「チョウナ」と呼称する横斧とは異なる小型の縦斧と考察している。「斧(音)」は、「それを打つ音が遠くまで聞こえることから、斧柄を両手で握り、力を込めて使用する伐木用の大型縦斧と推定される」という。工具を手にするのではない私にとって、思いも及ばないことである。

古代・中世、近世の項目では、『近世職人尽絵詞』など絵画資料からの考察がなされているのも特徴的である。工具の使用法・形状、作業工程など、絵図から得られる情報は多い。工具以外の木製品全般についても同様で、遺物そのものを見ていただけでは分からなかったことが、絵図を見て気づかされるということは多々ある。絵図のほか民俗資料も重要な資料であり、不明遺物だったものに名前がつくこともある。遺物そのものだけではなく、絵画資料・文献・民俗資料など、関連資料も合わせて考えていく重要性を改めて認識させられた。

本書は、旧石器時代から近代までの建築・工具の歴史について200ページにおさまっており、中身の詰まった本である。なお、この本が出版された2004年10月の数か月前には、『日本建築技術史の研究—大工道具の発達史—』が出版されており、こちらはA4版433ページの大作である。絵図等も多数掲載され、より詳しく大工道具の歴史を知りたいときにはこちらが良いと思う。

著者は前述のとおり、竹中大工道具館の主席研究員をされていた。数年前に竹中大工道具館を訪れた時のことをふと思い出した。縄文時代から近・現代まで、工具・大工道具がずらりと並ぶインパクトのある博物館で、楽しく見学させていただいた覚えがある。

今回この文章を書くにあたって調べてみたところ、館は2014年に新神戸駅の近くに移転していた。日本庭園をもつ和の建物で、職人の技術が建物のあちこちにちりばめられているこだわりの建物であるとのこと。前の館はコンパクトなところも良かったが、現在の建物では展示スペースも広くなった様子である。私自身なかなかすぐに行くことができないが、もう一度訪れたいという思いが起こった。

本書が出版されてから13年がたち、新しく加わった研究成果は多くあると思う。それでも、コンパクトに工具や建築をまとめた一冊として、また、工具や木製品の研究視点について学ばせてくれた一冊として、手元に置いておきたい本である。

アルカ通信 No.162

発行日 2017年3月1日
企画 角張淳一(故人)
発行 考古学研究所(株)アルカ
〒384-0801 長野県小諸市甲49-15
TEL 0267-25-0299
aruka@aruka.co.jp URL : http://www.aruka.co.jp